

天気を表す漢語と漢越語の単音節語の特徴

——中国語との比較を通して——

Pham Thi Thanh Hoa

はじめに

天気は人間の生活に密接に関わる自然現象であり、その表現には各言語の特質が反映される。漢字文化圏に属する日本とベトナムは、古来より中国語から多くの語彙を借用してきた。しかし、これまでの日越対照研究において、漢語・漢越語に関する一般的な考察は多く行われているものの、「天気」を表す「単音節語」に焦点を当て、中国語原義との比較を通してその受容と変容の全体像を明らかにした研究は管見の限り見当たらない。そこで本稿では、日・越・中三言語の資料に基づき気象現象を表す語彙を抽出する。そして、日本語の漢語（26語）とベトナム語の漢越語（14語）を対象に、語音・自立語性・表記・意味の各側面から分析を行い、両言語が中国語語彙をいかに受容し、独自化させたのかを明らかにすることを目的とする。

1. 先行研究の概要及び考察の範囲

1) 先行研究の概要

日本語における漢語及びベトナム語における漢越語に関しては、古くから多くの研究がなされてきた。

日本語における漢語の包括的な研究としては、漢語の受容史や形態的・意味的特徴を概説した山田孝雄（1940）や、多角的な視点から論じた沖森卓也編（2017）が挙げられる。個別側面の研究では、音韻論における高山知明（2002）、語構成における野村雅昭（1976）や高野繁男（2004）、あるいは漢語サ変動詞を扱った小林英樹（2004）等の業績がある。

ベトナム語における漢越語研究の端緒は王力（1948）にあり、同書は漢越語を「古漢越語」「漢越語」「越化漢語」の3タイプに分類した。また、接触史および音韻に関しては、Nguyễn Tài Cẩn（1979）が定評がある。その他、借用語研究には Nguyễn Thiện Giáp、Trần Trí Dồi、Cao Xuân Hạo、Nguyễn Văn Khang 等の貢献が見られる。近年の研究は個別分野に特化する傾向にあり、例として現代語の程度副詞を扱った武清香（2020）や、歌謡中の漢越語を扱った張越君（2021）などが挙げられる。

以上の通り、従来の研究は包括的なものから個別具体的なものへと深化しているが、中国語との比較を通して、天気を表す漢語と漢越語の単音節語の特徴を明らかにする研究は見当たらない。

2) 考察の範囲

世界気象機関（WMO 2024）は天気の種類を構成する五つの気象要素を示している。それは、気温、降水量、気圧、風、湿度である。これらの要素はそれぞれ独立して存在するのではなく、互いに影響を及ぼし合いながら、様々な天気のパターンを生み出している。地理的な位置によって各地域の天気は異なる場合があるが、代表的な現象として挙げられるものには、晴れ、雲、雨、雪、風、雷、霧、氷がある。これらはいずれも、ベトナム・日本・中国において観測される一般的な天気の現象である。本研究は漢字要素を含む天気語彙に焦点を当てる。例えば、くも（雲）を表すには、中国語は「云 (yún)」、日本語は「雲 (un)」、ベトナム語は「vân」を用いている。

また、漢語および漢越語には、中国語からの借用語だけでなく、漢字を用いてそれぞれの言語内で独自に造語された語彙も存在する。これらは日本語では「和製漢語」、ベトナム語では「越製漢越語」と呼ばれる。本研究では、中国語との比較を行うため、日越独自の造語は除外し、中国語からの借用語彙に着目し、分析を行う。

調査資料については、まず辞書から収集した。具体的には以下の辞書を使用した。

- ① 中国語：『現代漢語詞典（第6版）』
- ② 日本語：『デジタル大辞泉』、『日本国語大辞典（精選版）』、『字通（普及版）』¹
- ③ ベトナム語：『Từ điển các yếu tố Hán Việt thông dụng』（常用漢越要素辞典）、『Từ điển tiếng Việt』（ベトナム語辞典）

辞書からの語彙選定の後、それらの語が日越両言語において実際に使用されているかを検証した。特に本稿における「日本語の語彙」の認定には慎重な判断を要する。なぜなら、大規模な辞書や中辞典には、現代語としては使用されない語彙や、漢文（古典中国語）訓読の文脈にしか現れない語義も収録されているためである。従って、本稿では単に辞書への掲載のみを根拠とはせず、その語義が和文脈（日本語の文章）において定着しているもの、あるいは現代語として母語話者に認識されているもののみを考察対象とする。たとえ日本人が著した文献であっても、漢文の用例のみに見られる語義は除外することとした。具体例として、「風（ふう）」が挙げられる。「風」には「『詩経』の六義の一」という意味があるが、その典拠を確認すると、平安時代の『作文大体』等の漢文資料にとどまる。

¹ 本稿では、コトバンク (<https://kotobank.jp/>) に収録されている版を参照した。

これらは日本人の著作とはいえ、古典中国語の文脈で用いられたものであり、日本語の語彙として定着しているとは言い難い。よって、本稿ではこのような語義は分析の対象から外している。

2. 天気を表す日本語の漢語における単語の特徴

典型的な大気現象を表す日本語の漢語における単語の数は、26語である。それは風 (fū)、嵐 (ran)、颯 (hyō)、雨 (u)、霖 (rin)、雲 (un)、霓 (gei)、虹 (kō)、曇 (don)、暈 (un)、霧 (mu)、霜 (sō)、霞 (ka)、靄 (ai)、露 (ro)、雪 (setsu)、雷 (rai)、電 (den/ten)、霆 (tei)、霹 (heki)、靨 (reki)、晴 (sei)、霽 (sei/sai)、旱 (kan)、氷 (hyō)、陽 (yō)である。本研究では、これらの語について、音韻的特徴、単独使用可能性、及び借用の諸側面の3点から以下のように考察を行う。

1) 音韻的特徴

これらの語は、音読みで発音される。つまり、もともとは中国語の発音であるが、日本語の音韻体系の影響により、多少の違いが生じている。以下の例は、音読みと中国語の発音との間に一定の対応関係が見られることを示している。

漢字	中国の発音	日本語の発音（音読み）
霜	[shuāng]	[sō]
靄/靄	[ǎi]	[ai]
阳/陽	[yáng]	[yō]

しかし、一見すると発音の類似性が低く、対応関係が直感的に捉えにくい語も存在する。例えば、下表の霽・晴・靨である。

漢字	中国語の発音	音読み
霽/霽	[jì]	[sei/sai]
晴	[qíng]	[sei]
靨/靨	[lì]	[reki]

中国語の単語は、1つの完全な音節として発音されるのが一般的であるが、日本語に取り入れられる際、多くの漢語は2音節の語となるか、2音節相当の長さで発音されることがある。例えば、2音節に分かれる例としては、霹 (re-ki)、雪 (se-tsu)などが挙げられる。また、1音節だが長音で2音節相当の長さをもつ例としては霜 (sō)、虹 (kō)、陽 (yō)などがある。

2) 単独使用可能性の特徴

日本語に取り入れられた基本的な天気語彙に属する漢字要素の多くは、単独で用いられない。その理由として、日本語にはすでに同様の意味を表す固有語が存在していたことが挙げられる。このことは、日本語における天気語彙が中国語を受け入れる以前の段階ですでにある程度完成されていたことを裏付けている。

従って、日本語の中で無理なく存在できるように、殆どの漢語単語は「語」としての機能を失い、「造語要素（形態素）」になったわけである。すなわち、中国語において自立語として機能していたものが、日本語では形態素として扱われるようになったのである。

本稿で扱う 26 の気象語彙のうち、音読み（漢語）がそのまま自立語として機能するのは、「風（フウ）」や「陽（ヨウ）」など極めて少数の例に限られる。以下の表に、その代表例である「風（フウ）」について、形態素として用いられる場合と、自立語として用いられる場合の意味の対照を示す。

表 1：形態素としての「風（フウ）」と自立語としての「風（ふう）」の意味

形態素としての「風（フウ）」	自立語としての「風（ふう）」
1. 大気の動き。かぜ。「風雨・風速」	1. ある地域・社会などの範囲内で一般に行われている生活上の様式。また、やり方・流儀。風俗・習慣。ならわし。「昔の風を守る」「武家の風」
2. 人々に影響を与えてなびかせること。感化力。また、習わしや様式。「風教・風習・風俗」	2. 人や物の姿・かっこう。風体。「医者風の風を装う」
3. それとなく伝わること。「風説・風評・風聞」	3. それらしいようす。ふり。「知らない風をする」
4. 姿やようす。「風格・風景・威風・好風」	4. 世間への体裁。聞こえ。「隣近所へ風の悪い思いをする」
5. 味わい。おもむき。「風趣・風味・風流」	5. 性格の傾向。性向。「人を疎んじる風がある」
6. （主に漢文脈）詩歌。民謡風のうた。「国風」	6. 名詞に付いて、そういう様式である、そういう外見である、その傾向がある、などの意を表す。「地中海風の料理」
7. 病気。「風疹・中風・痛風」	
8. さかりがつく。「風馬牛」	

（出典：『デジタル大辞泉』）

「風（ふう）」が自立語として用いられる場合、風（かぜ）に関する意味は見られないことが分かる。この語はむしろ、風格・様子・体面・傾向といった意味に集中している。この現象は、「風（かぜ）」という和語が既にあつたために、同義の自立語を新たに借用

できなかったのだと考えられる。もしそうした借用が行われた場合、「語彙借用における意味の衝突現象」が生じる可能性があるからである (Nguyễn Văn Khang 2007: 149)。

3) 借用の諸側面

日本語の漢語において、音声(音韻)、文字(表記)、意味(語義)の三つの側面が借用されているといえる。

音韻的側面から見ると、日本語はモーラ言語である。「音節」に加えて、「拍(モーラ)」という単位が存在する。一部の日本語学者は、日本語の「拍」を音節とみなしている(日本語教育学会 1996: 209)。その理由は、「拍」は基本的に1短音節と相当する音の長さを持つためである。「撥音 /N/ (ん)」、「促音 /Q/ (っ)」、「引く音 /R/ (ー)」といった三つの特殊拍を除けば、殆どの語において、音節数と拍数は一致する。

日本人は中国語の言葉を借用する際、その中国語の発音を模倣しようとしたが、言語類型の違いにより、完全に同じ発音を再現することは難しかった。具体的に言えば、日本語は膠着語であり、声調を持たず、音節の種類も少ない。それに対して、中国語は孤立語に分類され、声調を持ち、音節の種類が豊富である。

また、古典中国語の1語は原則として1音節で構成されるが、日本語は多音節言語なので、1音節のみで語を発音することに不安定さを感じさせる傾向がある(秋元 2002: 50)。その結果、中国語の単音節語は日本語の音韻体系に適合させる形で音声的な調整や変化が加えられることが多い。

天気に関する日本語の漢字要素について、音節数および拍数を考察すると、次のような表が得られる。

表2: 日本語における天気を表す漢字要素における音節数および拍数一覧

順	音読み	音節数/ 拍数	順	音読み	音節数/ 拍数
1	U (雨)	1/ 1	14	De-n (電)	1/ 2
2	Mu (霧)	1/ 1	15	Ka-n (旱)	1/ 2
3	Ka (霞)	1/ 1	16	Hyo-u (氷)	1/ 2
4	Ro (露)	1/ 1	17	Yo-u (陽)	1/ 2
5	Fu-u (風)	1/ 2	18	Ge-i (霓)	1/ 2
6	Ra-n (嵐)	1/ 2	19	Te-i (霆)	1/ 2
7	Hyo-u (颯)	1/ 2	20	Se-i (晴)	1/ 2
8	Ri-n (霖)	1/ 2	21	Se-i (霽)	1/ 2
9	U-n (雲)	1/ 2	22	He-ki (霹)	2/ 2

順	音読み	音節数/拍数	順	音読み	音節数/拍数
10	Ko-u (虹)	1/2	23	Re-ki (霰)	2/2
11	Do-n (曇)	1/2	24	A-i (靄)	2/2
12	U-n (暈)	1/2	25	Se-tsu (雪)	2/2
14	So-u (霜)	1/2	26	Ra-i (雷)	2/2

表2から見ると、天気を表す漢字要素26語の発音は、音節数と発音の長さに基づいて次の三つに分類できる。

類型1 (1音節・1拍) : 4語 (約15.4%)

漢語音がそのまま単音節であり、発音の長さも1拍に相当するもの。

類型2 (1音節・2拍) : 17語 (約65.4%)

漢語音は依然として単音節であるが、長母音、二重母音、あるいは撥音を伴うことで、発音の長さが2拍になっているもの。

類型3 (2音節・2拍) : 5語 (約19.2%)

漢語音が二音節に変化し、発音の長さも2拍相当になっているもの。

以上のデータから、類型1(1拍語)は全体の約1割強に過ぎず、類型2と類型3を合わせて全体の約84.6%(22語)と圧倒的多数を占めていることが明らかになった。

秋元美晴によれば、日本語の音節は極めて単純な構造なので、「木(き)」「目(め)」「歯(は)」などの単音節語の存在はそれほど多くない。その理由として、日本語において単音節語は短くて、不安定な印象を与えるためである(秋元2002:50)。つまり、1拍の単音節語が持つこの「不安定さ」こそが、中国語の単音節語が日本語に取り入れられる際に、音声的に引き延ばされたり、二音節語に変化したりする理由を説明している。これは、日本語の音韻体系に適合させるための同化現象と考えられる。

表記の側面では、現代日本語の漢語表記は、伝統的な旧字体を基礎としつつも、現在は日本の国語施策に基づいた字体(新字体)が一般的に用いられている。本調査対象の26語について具体的に見ると、その大部分は旧字体の字形をそのまま維持している。本来の字形から改められた新字体となっているのは、わずかに以下の2語のみである。

旧字体	新字体
冰	氷
晴	晴

意味の側面では、日本語に用いられる漢語は、中国語から意味を借用している。これらの語彙の意味のあり方には、主に三つの傾向が見て取れる。それは、意味の保持（保留）、意味の縮小、そして意味の拡張である。以下に、それぞれの傾向を説明する。

意味の保持の場合、26の漢字要素のうち、11の要素は中国語の語義を保持している。それらは颯、霖、虹、霓、曇、雪、霹、靂、晴、霆、霜である。具体的に以下の表で示す。

表3：中国語の語義を保持している漢字要素

中国語	日本語	意味	日本語での用例
颯(biāo)	颯(hyō)	つむじかぜ。吹きあげる激しい風。	<small>ひょうひょう</small> 颯颯 例：「長風颯々と吹き来りて…」幸田露伴『いさなとり』（1891）
霖(lín)	霖(rin)	ながあめ。長時間（三日以上）降り続く雨。	<small>しゅうりん</small> 秋霖 例：「秋霖前線」
虹(hóng)	虹(kō)	にじ。雨上がりの空などに見られる、七色のアーチ形のもの。にじを竜とみなし、雄を「虹」、雌を「霓」（ゲイ）と呼ぶ。中国語の場合、「主虹」という	<small>はっこう</small> 白虹 例：「…白虹につらぬかれ甚光りを失へば」（浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』）
霓(ní)	霓(gei)	にじ。薄い光の虹。 にじを竜とみなし、雄を「虹」、雌を「霓」（ゲイ）と呼ぶ。 中国語の場合、「副虹」という。	<small>こうげい</small> 虹霓 例：「真善美は人生の中空に淡く浮かべる虹霓にあらずして…」網島梁川『病間録』
曇(tán)	曇(don)	空がくもる。	<small>どんてん</small> 曇天 例：「曇天にして日星見得ず」『長器論』（1801）
雪(xuě)	雪(setsu)	1. ゆき。 2. 雪のように白い。白いもの。 3. 洗い清める。すすぐ。	<small>せきせつ</small> 積雪 例：「積雪量」
霹(pī)	霹(heki)	かみなり。かみなりが落ちる。	<small>へきれき</small> 霹靂 例：「青天の霹靂」
雳(lì)	雳(reki)	(古語) 激しく鳴る雷。	同上

中国語	日本語	意味	日本語での用例
晴 (qíng)	晴 (sei)	はれる。はれ。空がよくはれる。	快晴 例：「今日は雲一つない快晴だ。」
霆 (tíng)	霆 (tei)	1. かみなり、かみなりのおと、かみなりのとどろき。 2. いなずま、いなびかり、電光。 3. ふるう、はためく。	<small>らいてい</small> 雷霆 例：「動けばどう変化するか、風雲か雷霆か、見わけのつかぬところに余韻が...」夏目漱石『草枕』
霜 (shuāng)	霜 (sō)	1. しも 2. 霜のようなものを比喩的に表す語	霜害 例：「霜害を受ける」

特に、中国語と日本語の両方に存在する「霜」という漢字要素は、辞書の記述を一見すると、その意味内容に相違があるかのような印象を受ける。実際、中国語の辞書には①自然現象の霜、②霜のようなものを比喩的に表す語、③白い色を示す語、といった意味が記載されている。一方、日本語の辞書では、①しも、②としつき、③白いもの・冷たいもの・厳しいものの比喩、と定義されている。ここで、日本語に見られる「星霜」のような「としつき・歳月」という意味用法は、一見すると日本語独自の項目のように思われる。しかし、これは「毎年冬に霜が降りることから、その回数を年数に置き換えた」という中国語の比喩的用法の範疇に含まれるものである。従って、日中両言語における「霜」は、本義である「気象現象」と、そこから派生した「比喩的な意味（白さ・冷厳さ・歳月）」という点で、意味内容が高いレベルで合致していると言える。

意味の縮小の場合、26語のうち、5語に意味の縮小が見られる。それは、風、霽、氷、旱、陽である。以下の表でまとめる。

表 4: 中国語と比較して意味が縮小された漢語の要素

漢字要素	中国語	日本語
風/風	11 義	8 義
霽/霽	2 義	1 義
氷/氷	4 義	3 義
旱/旱	4 義	3 義
阳/陽	9 義	6 義

例えば、「霽(霽)」という要素は、中国語では動詞として以下の二つの意味を持つ。

- ① 雨の後に晴れること。「雪霽」
- ② 怒りが収まること。

しかし、日本語では第一の意味のみが借用されており、第二の意味は取り入れられていない。

また、「氷(氷)」という要素は、中国語において以下の四つの意味を持つ。

- ① 氷(0度以下で凝固した水)。
- ② 非常に冷たいものに触れたり、食べたりして冷たさを感じる事。
- ③ 冷蔵・冷却すること。
- ④ 氷のように透明なもの。

日本語では第1義と第4義のみが受容されたが、それらに加えて「凍る」(「氷結」「氷点」など)という動詞的な意味も派生している。

意味の拡張の場合、最も多く見られる傾向であり、26語のうち9語に該当する。漢字要素の意味は、中国語の元の語義と比べ、1つか2つの新たな意味を発展させている場合がある。具体的には以下の通りである。

原語と比較して意味が1つ追加されたのは、全9語のうち7語であった。このパターンは意味の拡張の中で最も多く見られるケースである。

例として、「嵐」は中国語では「山のみずみずしい気」という意味のみを持つが、日本語ではこれに加えて「あらし」という意味が追加されている。「靄」、「霧」、「雷」などにも同じ傾向が見られる。これらは中国語の天気に関する意味を保持しながら、日本語ではさらに1義ずつ拡張されている。

このように、日本語は中国の漢字要素の意味をそのまま受け入れるだけでなく、日本人の感覚や認識に合うように意味を変化・拡張させることもあるということがわかった。

原語と比較して意味が2つ追加されたのは、全9語のうち2語である。例えば、中国語の「云(雲)(yún)」は、以下の3つの意味を持っている。

- ① 雲(くも)
- ② 雲南省の略称
- ③ 姓(雲氏)

それに対して、日本語における「雲(ウン)」は、以下の5つの意味を持っている。

- ① 雲(くも)
- ② 雲のような姿(曖昧さ、軽やかさ、消えてしまう様子を象徴する)。「雲散」
- ③ 高貴な身分。「雲客」

④ 空(文語的表現)。

⑤ 「出雲の国」

従って、日本語は中国語の第1の語義「くも(雲)」のみを借用し、中国語の残りの語義を借用せず、新たに4つの意味を付け加えている²。

要するに、意味の発展は、日本語が漢字要素を同化してきたことを表す一つの傾向であることが分かる。新たに発展した意味の数が多いほど、日本語における同化の過程がより強く進んでいることを示している。この過程は、漢字要素を日本語により近づけ、深く融合させることを目的としている。実際、現在の日本人の多くは、漢語(漢字由来の語彙)を外来語とは見なさず、和語と同様に親しみのある語彙として受け入れている。

その他の事例として、日本語において意味の縮小と新たな意味の派生(拡張)が同時に生じているケースがある。以下に、「電」を具体例として取り上げる。

中国語では、電(diàn)は名詞および動詞として機能し、以下のように6つの語義を持っている。

- ① [名詞] 電気、電能(電気エネルギー)。
- ② [名詞] 稲妻、電光。降雨時に雲が放電する際に発せられる光。
- ③ [名詞] 電報、電信。
- ④ [名詞] 姓の一つ。
- ⑤ [動詞] 感電する、電流によるショックを受ける。
- ⑥ [動詞] 打電する、電報を送る、電話をかける。

一方、日本語における電(den)は以下の5つの語義を有している。

- ① いなずま。「電光/紫電・雷電」
- ② いなずまのように急なさま。「電撃/逐電」
- ③ 電気のこと。「電圧・電化・電灯・電力/感電・充電・送電・帯電・停電・発電・放電・漏電」
- ④ 「電信」「電報」の略。「電文/外電・祝電・打電・弔電・返電・無電」
- ⑤ 「電車」の略。「市電・終電」

両者を比較すると、中国語の語義1・2・3は、それぞれ日本語の語義3・1・4に対応している。また、中国語の動詞としての語義5・6は、日本語の国語辞典において単独の語義としては記載されていないが、実際には「感電」「打電する」「架電する」「来電」などの熟語が存在している。従って、日常的な使用頻度は高くないものの、日本語において

² 今回は日中の現代の辞書を比較する方法をとったため、このような結果となったが、このうち日本語②の語義は古典中国語でも常用されるものであり、必ずしも日本語で派生した意味とはいえない。

もこれらの語義が保留されていると見なすことができる。

さらに、日本語の語義2（素早さの比喻）は、中国語の辞典（上記6項目）には明記されていないものの、中国語には「风驰电掣（fēng chí diàn chè：風のように吹きすさび稲妻のように駆け抜ける様。主に車両の猛スピードを表す）」や「飞云掣电（fēi yún chè diàn：飛ぶ雲や稲妻のように極めて速いこと）」などの成語が存在している。すなわち、中国語でもこの意味合いは機能していると言える。

以上のことから、日本語は中国語の語義4（姓）を受容しておらず、その一方で、中国語には存在しない「電車の略（例：市電、終電）」（日本語の語義5）という新たな語義を独自に発展させている。従って、日本語は中国語と比較して、意味の縮小を行うと同時に、新たな意味の派生（拡張）も行っていると言えるのである。

漢字要素が日本語においていかに柔軟に借用され、同化され、また意味がどのように発展してきたかを明らかにするために、ここでは日本語の「風（フウ）」という要素を具体的に分析する。

中国語において、「风（fēng）」は一般的な「かぜ」を意味する語である。この語が日本語に入る際には、漢字「風」と音読み「フウ」の両方が借用された。しかし、日本語にはすでに同じ意味を持つ和語「かぜ」が存在していたため、「語彙借用における意味の衝突現象」が発生した。

借用に関する一般的な規則によれば、ある外来語が既存の語と意味的に重複する場合には、次の二つの可能性が考えられる。

1. すでに該当する語があるため、新たな語は借用されない。
2. 借用はされるが、意味または文法的地位（語彙的な機能）を変化させる必要がある。

以下に、このような可能性を概念図としてまとめた。

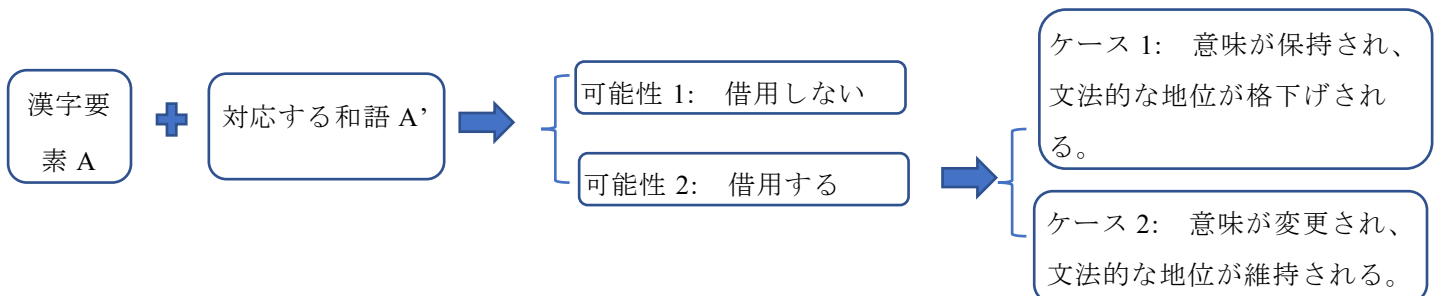


図 1: 借用の可能性に関する図解

中国語の「风（fēng）」は、意味が対応する和語と出会った結果、可能性2が起こった。すなわち、「风（fēng）」は日本語の体系に取り入れられ、「風（フウ）」として定着した。

通常、漢字要素が他の言語体系に取り入れられたとき、図1に示されているように、「意味が保持され、文法的な地位が格下げされる」か、「意味が変更され、文法的地位が維持される」で発展する。しかし、特筆すべきことに、「风（fēng）」に対応する「風（フウ）」は、両方のケースを兼ね備えている。具体的には、「風（フウ）」は、日本語において単語としても、形態素としても存在している。

日本語の語彙体系では、和語「風（かぜ）」、形態素としての「風（フウ）」、そして語としての漢語「風（ふう）」が意味的に重複しないよう、それぞれの意味領域が巧みに整理・分担されている。以下に、それら三つの「風」と、中国語「风（fēng）」の語義を比較した表を示す。

表5：日本語における「風」の借用と意味変容の比較表

和語の「風（かぜ）」	中国語の「风（fēng）」	日本語の形態素「風（フウ）」	日本語の語「風（ふう）」	備考
1. かぜ	1. かぜ	1. かぜ	∅	和語は「かぜ」の意味を持つから、「風（フウ）」は原語の意味を保留し、形態素になる。①
2. 風習。習わし。	2. 風習	2. 風俗。習慣	∅	同上①
3. （多く「風邪」と書く）鼻・のど・気管などのカタル性炎症	3. 中医学では、特定の病気を指す。	3 病気。「中風・痛風」	∅	同上①
∅	4. 風景	4. 外見、風袋：・姿やようす。「風景・風格」	∅	和語はこの意味を持たない。「フウ」は形態素になる。②
∅	5. 風格「作风・风度」	・味わい。おもむき。「風致」 ・習わしや様式。「気風・作风」		

和語の「風（かぜ）」	中国語の「风 (fēng)」	日本語の形態素「風 (フウ)」	日本語の語「風 (ふう)」	備考
∅	6. 便り、消息、ニュース 7. 根拠のない噂.	5. それとなく伝わること。「風説・風評・風聞」	∅	同上②
∅	8. 民謡。（『詩経』の「国風」は、古代十五国の民謡である）	6. 詩歌。民謡風のうた。	∅	同上②
∅	∅	∅	1. それらしいようす。ふり。「知らない風をする」	日本語において新たな意味が作られた。「ふう」は自立語である。③
∅	∅	∅	2. 世間への体裁。聞こえ。「隣近所へ風の悪い思いをする」	同上③
∅	∅	∅	3. 人や物の姿・かっこう。なり。風体。「医者風の装う」	同上③
∅	∅	∅	4. 性格の傾向。性向。「人を疎んじる風がある」	同上③
-	∅	∅	5. ある地域・社会などの範囲内で一般に行われている生活上の様式。また、やり方・流儀。風俗・習慣。ならわし。「昔の風を守る」	同上③
∅	∅	∅	6. 名詞に付いて、そういう様式である、そういう外見である、その傾向がある、などの意を表す。「地中海風の料理」	日本語は新たな意味を作った。「フウ」は接尾辞である。

和語の「風(かぜ)」	中国語の「风(fēng)」	日本語の形態素「風(フウ)」	日本語の語「風(ふう)」	備考
4. その身に感じられる人々のようす。また、世の中の動きやありさま。「野党に風が吹く」	∅	∅	∅	-
5. [接尾語] そういうそぶり、様子、それらしく偉そうな様子を表わす。「大尽風」「役人風」	∅	∅	∅	-
6. 寄席芸人用語で、扇子のこと。	∅	∅	∅	-
∅	9. 風の力を利用して物を乾燥させたり、浄化したりする行為。干す	∅	∅	日本語は借用しない。④
∅	10. 風の力を借りて乾かしたもの。「风鸡・风肉」	∅	∅	同上④
∅	11. 速い、素早い	∅	∅	同上④

漢字要素「風(フウ)」が日本語に借用された際に、自立語として存在するか、それとも造語要素として存在するかは、和語「かぜ」がすでに持っている各語義によって決定されると考えられる。上の表を見ると、次の四つの場合に分けられる。

第一に日本語の「かぜ」が中国語の「风(fēng)」と同じ意味を持つ場合である。これは、表5の最初の三つの語義、すなわち「1. かぜ」、「2. 風習・習慣」、「3. 病気」に該当する。この場合、中国語の語義を保持したまま日本語に取り入れられるために、「風(フウ)」は文法的な地位を格下げして形態素になった。つまり、「風(フウ)」は自立語として存在できず、他の要素と結びついて語を構成する形でのみ存在することができる。

第二に日本語の「かぜ」と中国語の「风(fēng)」の意味が対応しない場合である。この場合、「風(フウ)」は日本語において形態素として用いられる。表5に示す中国語の「风(fēng)」の語義4~8がこれに該当する。そのうち、「4. 風景」、及び「5. 風格」という意味は日本語の「かぜ」にはないので、これらの意味範疇は日本語で一つの語義と

して統合され、「風(フウ)」は造語要素として使用される。同様に、中国語「风(fēng)」における「6.知らせ、ニュース」及び「7.根拠のない噂」の両義も日本語では一つの意味として集約されている。この場合も「風(フウ)」は形態素として使用される。このように、中国語の二つの語義が合わさって日本語では一つの意味として取り込まれるという「意味の統合現象」が見られる。

第三に日本語の中で「風(フウ)」に新しい語義を生み出す場合である。この場合は更に以下のように二つに分けられる。

一つ目は、日本語が「風(ふう)」に新しい語義を作り出し、「風(ふう)」が自立語として格上げされる場合である。新しく付与された語義は、次の五つである。

- ① それらしいようす。ふり。
- ② 世間への体裁。聞こえ。
- ③ 人や物の姿・かっこう。なり。風体。
- ④ 性格の傾向。性向。
- ⑤ ある地域・社会などの範囲内で一般に行われている生活上の様式。また、やり方・流儀。風俗・習慣。ならわし。

もう一つは、日本語が独自に意味を発展させ、「風(フウ)」が接尾語として機能するようになった場合である。それは、「6.名詞に付いて、そういう様式である、そういう外見である、その傾向がある、などの意を表す」ケースである。

このように、日本語は単に意味を借用するだけでなく、文法的な地位を変えたり、和語に合わせて意味を再配分したりした。また、中国語「风(fēng)」の基本的な語義に基づいて、新たな語義を付加することで語彙を豊かにしていることが分かる。これは、既存の音韻形態を利用して新しい意味を生み出すという、言語における「節約の原理」を示す一例であろう。

第四に日本語が中国語の意味を借用していない場合である。「9.風の力を利用して物を乾燥させたり、浄化したりする行為。干す」と「10.風の力を借りて乾かしたもの」と「11.速い、素早い」がこれに当たる。

これらの語義を借用しなかった理由は、日本語に既にそれらに相当する語が存在していたためである可能性がある。たとえば、「干す」や「乾かす」などの動詞で表すことができる。或いは「風のように速い」ではなく、稲妻のように速い「電光石火」という表現も日本語では一般的に用いられる。

要するに、中国語の「风(fēng)」と、日本語の「風(フウ)」と「風(かぜ)」の意味を比較・分析することで、言語的借用の複雑な調整のあり方が明らかになった。日本語は、借用した漢字要素が和語と意味的に衝突しないよう、語義を巧みに整理・分担してき

た。とりわけ、漢字要素に異なる文法的機能を持たせることで、自然な受け入れを可能にしている。こうした工夫が、二音節語・多音節語の導入と定着をも促進していると考えられる。

さらに、日本語では漢語音「風（フウ）」を効果的に活用し、その基本的な意味を基盤として、中国語や和語にはなかった多くの語義を生み出してきた。これらの語義は原義と一定の関連性を保ちつつ、独自の意味領域を形成している。また、「風（フウ）」は形態素としての機能を超え、一つの語としても用いられるようになった。言い換えれば、「風（フウ）」は天気を表す漢字要素の中でも、意味的拡張と機能的変化の両面において注目すべき事例である。

3. 天気を表す単音節漢越語の特徴

典型的な大気現象を表す漢越語の単音節語は、全部で 14 語である。上の日本語の場合と同様に、これらの語について音韻的特徴、単独使用可能性、及び借用の諸側面などの観点から以下のように考察を行う。

1) 音韻的特徴

漢越語は、中国語に由来する語であるが、発音はベトナム語音韻体系に適応した形で実現する。すなわち、原語の音はベトナム語の音韻体系に同化され、その中に自然に取り込まれている。また、単音節語として借用された語は、原語の音節数を保持しており、ベトナム語においても 1 音節のままである。例えば、下表のようになる。

表 6：中国語の発音と漢越語の発音の例

漢字	中国の発音	ベトナム語の漢越語の発音
霜	[shuāng]	[sưəŋ] /siəŋ/
露	[lù]	[lù] /?a:j/
陽	[yáng]	[dưəŋ] /ziəŋ/

2) 単独使用可能性の特徴

単独で使用される漢越語は、現代ベトナム語辞典において独立した見出し語として掲載されている。一方、単独使用不可能なものは辞典に載っておらず、漢越語の複合語の造語要素としてのみ用いられている。

14 語のうち、自立して使用できるのは 4 語である。それは「sưəŋ（霜）」「tuyết（雪）」「băng（氷）」「lộ（露）」である。いずれもベトナム語において対応する純ベ

トナム語（固有語）が存在せず、語彙的な空白を埋めるために漢越語として導入された語である。いわゆる「必要に応じた借用」の例である。

ただし、名詞としては単独使用可能である一方、他の品詞としては自立せず、単独で存在できないという場合も見られる。例えば、「tuyết（雪）」は、「tinh thể băng nhỏ và trắng, kết thành khối xốp, nhẹ, rơi ở vùng có khí hậu lạnh（寒冷地に降る白くて軽い氷の結晶）」という意味で名詞として使用される場合には単独で成立するが、「rửa（洗い清める。すすぐ）」の意味で動詞的に使用される場合には、複合語にのみ出現する。例えば、「tuyết cừ（仇を晴らす）」「tuyết hận（恨みを雪ぐ）」「tuyết si（恥をそそぐ）」などである。「băng（氷）」も同じである。

しかし、「sương（霜）」という漢字要素は、名詞でも形容詞でも単独で機能することができる。例えば、「tóc đã điểm sương（霜が混じった髪＝白髪が出始めた髪）」や「tóc sương（霜のような髪＝白髪）」などである。

また、名詞としては単独で使用できなくても、他の品詞であれば使用可能な場合もある。例えば、「lộ（露）」は「①〈名詞〉露の滴、②〈動詞〉露見する」の二義を持ち、このうち②は「lộ rồi!（ばれた!）」のように話し言葉で単独使用される。一方、①は「bạch lộ（白露）」「hàn lộ（寒露）」「vũ lộ（雨露）」など限られた語にのみ現れ、単独では語として成立しない。

14語のうち10語の漢越語は自立語としては使用されておらず、文法的には造語要素として機能している。具体的には、「phong（風）」「vũ（雨）」「vân（雲）」「nghe（霞）」「lôi（雷）」「đình（霆）」「hạn（旱）」「vụ（霧）」「hà（霞）」「lam（嵐）」である。

これらの語はいずれも、ベトナム語において対応する純ベトナム語が存在しているため、そのまま自立語として取り入れられず、文法的な地位を「語」から「造語要素」へと格下げすることで、言語体系への受け入れが可能となったと考えられる。以下は漢越語と意味的に対応する純ベトナム語の例である。

表7：漢越語要素とそれに対応する純ベトナム語

漢越語（漢字要素）	純ベトナム語
Phong（風）	Gió
Vân（雲）	Mây
Vũ（雨）	Mưa
Nghe（霞）	Cầu vồng

さらに、中国語は事物や概念に関して非常に細かく分類された語彙体系を持つ言語であるため、一つの気象現象に対して複数の語が存在することがある。そのため、ベトナム語が中国語と接触した際に、同じ現象を表す語を1語だけでなく、2語或いは3語を同時に借用する場合もある。ただし、それぞれの語には文法的な地位や使用範囲に違いが見られる。

例えば、しも(霜) やきり(霧)などを表すにはベトナム語には「*suong* (霜)」「*vũ* (霧)」「*lộ* (露)」の三つの漢字要素が存在する。そのうち「*suong* (霜)」は自立語として単独で使用されるが、「*vũ* (霧)」と「*lộ* (露)」は形態素として用いられる。

3) 借用の諸側面

日本語の場合と同じく、漢越語における音(音韻)、形(文字)、意味(語義)の各側面について、以下のように考察を行った。

文字の側面において、現在のベトナム語はクオックグー(*chữ Quốc ngữ*)と呼ばれるローマ字表記を用い、すでに漢字を使用していないため、文字体系としては借用していないと言える。

音韻の側面において、中国語の発音はベトナム語に借用されたが、ベトナム語の音韻体系によって同化された。その結果、「*âm Hán Việt* (音読みベトナム語)」とも呼ばれる独自の音韻体系が形成されている。これらの単音節語は簡潔に発音され、自然にベトナム語に溶け込んでいる。

意味の側面において、多くの漢字要素は単独使用不可能なので、それらの意味は『現代ベトナム語辞典』に掲載されていない。そのため、本研究では、天気を表す漢越語およびベトナムの漢字要素の意味について、『現代ベトナム語辞典(*Từ điển tiếng Việt*)』と『常用漢越要素辞典(*Từ điển các yếu tố Hán Việt thông dụng*)』の両方を参照して考察を行った。

原語である中国語の語義と比較した結果、ベトナム語における漢越語の意味は、以下の三つのタイプに分類できることが明らかになった。すなわち、意味の保持、意味の縮小、その他である。以下に具体例を示す。

意味を保持しているのは14要素のうち5要素である。具体的には、「*vũ* (雨)」「*hà* (霞)」「*lôi* (雷)」「*đinh* (霆)」「*lam* (嵐)」である。この中で「*lôi* (雷)」は、中国語の「雷」の二つの語義「①雷鳴、②地雷」を完全に保持している点が注目される。

意味を縮小しているのは14要素のうち8要素である。具体的には以下の通りである。

表8：中国語と比較して意味が縮小された漢越要素

漢字要素	中国語	ベトナム語
風/phong	11 義	6 義
霜/sương	3 義	2 義
露/lộ	4 義	2 義
霧/vụ	2 義	1 義
雪/tuyết	3 義	2 義
旱/hạn	4 義	1 義
冰/băng	4 義	1 義
雲/vân	3 義	1 義

例えば、「hạn（旱）」という要素は、中国語では以下の4つの語義を持つ。

- ① 干ばつ・日照り（長期間雨が降らないこと）「旱災」
- ② 乾いた・水がない 「旱傘」
- ③ 乾いた土地・陸地 「旱地」
- ④ 陸上交通「旱路」

ベトナムは第1の語義のみを借用しており、例えば「tát nước chống hạn（水を汲んで干ばつに対処する）」「nắng hạn（旱天・干ばつの日差し）」などのように使われる。

意味の縮小という傾向の中でも、漢越語は一般的に、中国語における最初の語義、すなわち「原義」を保持している。ただし、「phong（風）」を除けば、他の語はもう一つの語義のみを借用するにとどまっている。

この背景には、歴史的・文化的に中国が東アジアを主導してきたという事実がある。それは中国語にも反映され、語義の豊富さと精緻さを特徴としている。一方、ベトナム語は中国語と長く接触してきたが、「必要なときにのみ借用する」という原則に基づき、語彙を慎重に受け入れてきた。その結果、14の漢越語要素のうち8語（全体の57%）が、語義を絞った形で取り入れられている。すべての語義を無差別に受け入れると、語彙体系に混乱を招く可能性があるためである。

その他に、中国語では語義が細かく分かれているのに対し、ベトナム語ではその意味がより包括的・一般的に捉えられている場合もある。具体的には、「霓/nghe」がその一例である。中国語において「霓(ní)」は、副虹を指し、色の配列が主虹とは逆（赤が内側、紫が外側）である。主虹を表すには「虹(hóng)」という語がある。ベトナム語では「vân nghe」など「nghe（霓）」のみが借用され、「hông（虹）」は借用されてい

ない。そのため、「nghê(霓)」は元の限定的な意味合い(副虹)を保持することなく、「にじ」全般を指す語として意味が一般化されている。

要するに、天気を表す単音節の漢越語は、文字を借用せず、音と意味のみを取り入れている。意味の借用には「意味の保持」と「意味の縮小」が見られ、なかでも縮小が最も顕著である。ベトナム語は原義を中心に受容し、派生義は必要最小限にとどめている。単独使用可能性に関しては、14の漢越語要素のうち、自立語として使用されているのは4語のみであり、これらはベトナム語において対応する純ベトナム語が存在しないケースである。他の要素は、自立性を持たず、複合語の中でのみ出現する。

4. 漢語および漢越語と中国語の原語との対照

中国語を基準とし、まず中国語における天気を表す単音節語を収集し、次に、それらの語が、日本語およびベトナム語において、借用されているかどうかを調査・集計した。その結果は、以下の表に示すとおりである。

表9: 天気を表す単音節語: 中国語・漢語・漢越語の比較

現象	中国語	漢語	漢越語	備考
かぜ (風)	风 (fēng)	風 (fū)	phong (風)	
	飈 (biāo)	∅	∅	
	飈 (biāo)	飈 (hyō)	∅	
	飈 (liú)	∅	∅	
	飈 (liù)	∅	∅	
	飈 (sī)	∅	∅	
	飈 (sōu)	∅	∅	
あめ (雨)	雨 (yǔ)	雨 (u)	vũ (雨)	
	霖 (lín)	霖 (rin)	∅	
	雹 (báo)	∅	∅	
	霽 (xí)	∅	∅	
	潦 (lǎo)	∅	∅	
	霖 (mù)	∅	∅	
くも (雲)	云 (yún)	雲 (un)	vân (雲)	
	霽 (ǎi)	∅	∅	

現象	中国語	漢語	漢越語	備考
くも (雲)	霽 (wèi)	∅	∅	
	雯 (wén)	∅	∅	
	霞 (xiá)	霞 (ka)	hà (霞)	※中国語では「朝焼けや夕焼けに見られる色づいた雲」を意味している。 ベトナム語も中国語と同様の意味を保持している。日本語では「朝焼け・夕焼け」の意味に加え、特に「かすみ」を表す語として用いられている。
	虹 (hóng)	虹 (kō)	∅	
	霓 (ní)	霓 (gei)	nghe (霓)	
	霄 (xiāo)	∅	∅	
	曇 (tán)	曇 (don)	∅	
	晕 (yūn)	晕 (un)	∅	
しも (霜) もや (霧) など	霜 (shuāng)	霜 (sō)	surong (霜)	
	嵐 (lán)	嵐 (ran)	lam (嵐)	※中国語では、「霧」や「もや」に近い意味で用いられている。 日本語では「暴風」の意味に変化している。 ベトナム語では「山から立ち上る気」を意味する。例：「lam khí (嵐気)」
	霧 (wù)	霧 (mu)	vụ (霧)	
	露 (lù)	露 (ro)	lộ (露)	
	霭 (ǎi)	霭 (ai)	∅	
ゆき (雪)	雪 (xuě)	雪 (setsu)	tuyết (雪)	
	霏 (fēi)	∅	∅	
	霏 (pāng)	∅	∅	
	霰 (xiàn)	∅	∅	

現象	中国語	漢語	漢越語	備考
かみなり (雷)	雷 (léi)	雷 (rai)	lôi (雷)	
	电 (diàn)	電 (den)	∅	
	闪 (shǎn)	∅	∅	
	霆 (tíng)	霆 (tei)	đình (霆)	
	霹 (pī)	霹 (heki)	∅	
	雳 (lì)	霹 (reki)	∅	
晴れ	晴 (qíng)	晴 (sei)	∅	
	阳 (yáng)	陽 (yō)	∅	
	霁 (jì)	霽 (sei)	∅	
	旱 (hàn)	旱 (kan)	hạn (旱)	
こおり (氷)	冰 (bīng)	氷 (hyō)	băng (氷)	
合計	43 語	26 語	14 語	

上記の表から、8つの典型的な大気現象に関連して、中国語には単音節語が計43語あることが分かる。そのうち、日本語は26語(約60.5%)、ベトナム語は14語(約32.5%)を受け入れている。以下では、それぞれの大気現象を具体的に説明する。

【かぜ(風)】

中国語には「かぜ(風)」に関する単音節語が7語あり、そのうち日本語では2語、ベトナム語では1語が借用されている。この中でも「風(フウ/phong)」は、両言語に共通して受け入れられている代表的な要素である。

【あめ(雨)】

中国語には「あめ(雨)」を表す単音節語が6語存在し、日本語には2語、ベトナム語には1語が借用されている。このうち、「雨(ウ/vũ)」という要素は、日本語とベトナム語の両方に取り入れられている共通の借用語である。

【くも(雲)】

「くも(雲)」に関連する中国語の単音節語は10語あり、そのうち日本語では6語、ベトナム語では3語が取り入れられている。なかでも「霞(カ)」は注目すべき語である。中国語では「朝焼けや夕焼けに見られる色づいた雲」を意味し、ベトナム語もその意味を保持している。一方、日本語では「朝焼け・夕焼け」の意味に加え、特に「かすみ」の意味を持っている。なお、「雲(ウン/vân)」は、日本語・ベトナム語の双方に取り入れられた共通の借用語である。

【しも（霜）・きり（霧）など】

中国語には、しも（霜）・きり（霧）などに関連する単音節語が5語存在する。日本語には5語、ベトナム語には4語が借用されている。なかでも、興味深いのは「嵐／嵐／lam」というケースである。日本語の「嵐（ラン）」は「暴風（storm）」を意味するのに対して、中国語の「嵐（lán）」は「山里像霧似的水蒸气（山の中に発生する霧のような水蒸気）」や「山嵐」のように「霧」や「もや」を指す。ベトナム語の「lam（嵐）」も、「lam khí（嵐気）」のように「山から立ち上る気」を意味することから、中国語の意味に近いと言える。

他に、「霜（ソウ/suong）」「霧（ム/vũ）」「露（ロ/lộ）」の3つの要素が、日本語・ベトナム語の両方に共通して取り入れられている。

【ゆき（雪）】

中国語には「ゆき（雪）」を表す単音節語が4語存在するが、日本語とベトナム語の両方に借用されているのは「雪（セツ／tuyết）」のみである。

【かみなり（雷）】

中国語にはかみなり（雷）に関連する単音節語が6語あり、日本語には5語、ベトナム語には2語が借用されている。「雷（ライ／lôi）」および「霆（テイ／đinh）」は、日本語・ベトナム語の両方に共通して取り入れられている要素である。

【晴れ】

中国語には、「日差し」や「晴れ」に関連する単音節語が4語存在する。日本語は4語を借用しており、ベトナム語は1語のみを取り入れている。「早（カン／hạn）」は、日本語・ベトナム語の両方に共通して借用されている要素である。

【こおり（氷）】

中国語において、氷を表す単音節語は「冰（bīng）」の1語のみである。この語は、日本語およびベトナム語の両方において借用されている。

以下は、日本語とベトナム語における天気に関する中国語由来の単音節語の借用数を総括した表である。

表 10：日本語及びベトナム語における天気関連の中国語由来単音節語の借用数一覧

単位：語

現象	中国語	日本語	ベトナム語
かぜ（風）	7	2	1
あめ（雨）	6	2	1
くも（雲）	10	6	3

現象	中国語	日本語	ベトナム語
しも（霜）	5	5	4
ゆき（雪）	4	1	1
かみなり（雷）	6	5	2
晴れ	4	4	1
こおり（氷）	1	1	1
合計	43	26	14

日本語は、天気を表す漢字要素の借用数において、ベトナム語のほぼ2倍に達していることが分かる。なかでも、日本語では、しも（霜）、かみなり（雷）、くも（雲）に関する語の借用が多く見られる。一方、ベトナム語では主にくも（雲）としも（霜）に関する語が多く取り入れられている。

おわりに

本稿では、日本語の漢語とベトナム語の漢越語の天気を表す単音節語について、中国語との比較を通してその特徴を分析した。考察の結果、以下の三点が明らかになった。

第一に、日本語の漢語（26語）の特徴である。音韻面では、中国語の単音節語を日本語の音韻体系に合わせて受容する際、二拍化する傾向が見られた。自立語性については、「風」と「陽」を除く大半の語が単独では用いられず、形態素としての性格が強い。意味面では、原義を保持する傾向が最も強いが、同時に「嵐」や「霞」のように日本独自の意味を発展・拡張させた例も見られ、日本語の柔軟な受容態度が確認された。

第二に、ベトナム語の漢越語（14語）の特徴である。音韻面では単音節構造を維持しており、中国語との近似性が高い。しかし、表記においては漢字を離脱し、ローマ字表記へと移行している。自立語性に関しては、「suong（霜）」「tuyết（雪）」「băng（氷）」「lộ（露）」の4語が自立語として機能するものの、過半数の語は意味を縮小させており、日本語に比べて語彙数が少なく、使用範囲も限定的であることが分かった。

第三に、三言語の対照から見える相違である。日本語は借用した語彙数がベトナム語より多く、意味の拡張や変化を伴いながら豊富に語彙体系に取り込んでいるのに対し、ベトナム語は借用語数が限定的であり、意味用法も保守的あるいは縮小する傾向にある。

以上の考察から、同じ漢字文化圏に属しながらも、天気を表す漢語要素において、日越両言語は異なる傾向を示していることが明らかになった。日本語は原義の「保持」及び「発展」という傾向を持つのに対し、ベトナム語は意味の「縮小」という傾向を優先させ

ている。今後は、多音節語(熟語)における比較など、さらに範囲を広げた考察が課題となる。

参考文献一覧

1) 日本語文献

『デジタル大辞泉』『日本国語大辞典(精選版)』『字通(普及版)』、コトバンク、
<https://kotobank.jp/> (2025年7月3日閲覧)。

秋元美晴、2002、『よくわかる語彙』、アルク。

沖森卓也、2017、『漢語』、朝倉書店。

小林英樹、2004、『現代日本語の漢語動名詞の研究』、ひつじ書房。

高野繁男、2004、『近代漢語の研究：日本語の造語法・訳語法』、明治書院。

高山知明、2002、「日本漢語の史的音韻論的課題」『音声研究』6(1):44-52。

日本語教育学会、1996、『日本語教育ハンドブック』、大修館書店。

野村雅昭、1976、「現代漢語の語構成について」『情報管理』18(11):884-891。

山田孝雄、1940、『國語の中に於ける漢語の研究』、宝文館。

2) 中国語文献

王力、1948、「漢越語研究」『嶺南学報』9(1):1-96。

武清香、2020、『現代越南語中の漢越程度副詞研究』、上海外国語大学博士論文。

張越君、2021、『越南歌謡中の漢越語研究』、西南大学博士論文。

中国社会科学院言語研究所辞典編集室、2012、『現代中国語辞典 第6版』、北京：商務
印書館]

3) ベトナム語・英語文献

Đoàn Văn Điềm, Nguyễn Thị Bích Yên, 2015, Khí tượng đại cương, Hà Nội: Nhà Xuất Bản
Đại Học Nông Nghiệp. [ドアン・ヴァン・ディエム、グエン・ティ・ビック・
イエム、2015、『気象概論』、ハノイ：農業大学出版社]

Hoàng Phê cb, 2003, Từ điển Tiếng Việt, Đà Nẵng: Trung Tâm Từ Điển Học, Nhà Xuất Bản
Đà Nẵng. [ホアン・フェー編、2003、『ベトナム語辞典』、ダナン：辞典セン
ター、ダナン出版社]

Hoàng Văn Hành cb, 1991, Từ điển yếu tố Hán Việt thông dụng, Hà Nội: Nhà Xuất Bản
Khoa Học Xã Hội. [ホアン・ヴァン・ハン編、1991、『常用漢越要素辞典』、
ハノイ：社会科学出版社]

- Nguyễn Tài Cẩn, 1979, *Nguồn gốc và quá trình hình thành cách đọc Hán Việt*, Hà Nội: NXB Đại học Quốc gia Hà Nội. [グエン・タイ・カン、1979、『漢越語の読み方の起源と形成過程』、ハノイ：ハノイ国家大学出版]
- Nguyễn Văn Khang, 2007, *Từ ngoại lai trong tiếng Việt*, Hà Nội: Nhà Xuất Bản Giáo Dục. [グエン・ヴァン・カン、2007、『ベトナム語における外来語』、ハノイ：教育出版社]
- World Meteorological Organization (WMO), n.d., “Weather,” *WMO Website*, <https://wmo.int/topics/weather> (accessed Oct 24, 2024). [世界気象機関 (WMO)、日付不明、「Weather」、WMO ウェブサイト]

Abstract

Characteristics of Monosyllabic Sino-Japanese and Sino-Vietnamese Words Denoting Weather Phenomena: A Comparative Analysis with Chinese

Pham Thi Thanh Hoa

This study investigates the characteristics of Sino-Japanese and Sino-Vietnamese words that denote eight typical weather phenomena, focusing on three dimensions: phonology, independence, and borrowing.

For Sino-Japanese words, the results indicate that (1) many Chinese-origin words were adapted into two-syllable or equivalent length (two morae) forms in Japanese; (2) most borrowed morphemes cannot function independently, except for the elements *fuu* (風) and *yō* (陽); and (3) they exhibit borrowing in all three dimensions: phonology, orthography, and semantics. Among them, semantic preservation and extension are the most prominent.

Regarding Sino-Vietnamese words, the findings reveal that (1) monosyllabic Chinese-origin words retained their syllable count and followed Sino-Vietnamese pronunciation; (2) some elements can stand alone, but most are bound morphemes within compound words; and (3) modern Vietnamese borrowed Chinese phonology and semantics, not characters. Semantically, narrowing is the dominant tendency, followed by preservation, whereas semantic extension does not appear in the monosyllabic weather-related lexicon.

A comparison with the original Chinese vocabulary reveals that Japanese incorporated approximately 60.5% of Chinese weather-related terms, whereas Vietnamese adopted only about 32.5%. Notably, each weather phenomenon includes at least one shared borrowed element in both languages. This research clarifies how Japanese and Vietnamese borrows from Chinese-origin vocabulary.